

500号記念

日本大学文理学部における「満蒙」関係 諸記録の収集と保存および公開の試み

日本大学文理学部教授 松重充浩（学術顧問）

はじめに

戦前・戦中期の「満蒙」をめぐる様々な記録を如何に収集・保存し、如何に後世に継承していくのかということは、戦後70年以上を経過し、極めて重要かつ喫緊な課題となっていると言えよう。「満蒙」関係の歴史記録が持つ今日的重要性については、既に別稿で述べた経緯もあり（加藤聖文・田畑光永・松重充浩編『挑戦する満洲研究―地域・民族・時間』（東方書店、2015）掲載の拙稿）、ここでは繰り返さないが、本稿では、その重要性に鑑み、私が勤務している日本大学文理学部における戦前・戦中期「満蒙」関係記録の収集・保存と公開の取り組みを紹介し、より良い収集・保存と公開に

向けての情報提供の一つとしていければと考えている。

1. 日本大学文理学部における戦前・戦中期「満蒙」関係記録収集の経緯

日本大学文理学部において戦前・戦中期「満蒙」関係記録の収集を開始する重要な契機となったのが、「平成15～19年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業・デジタルアーカイブ・インフラストラクチャの構築と高度利用」（研究代表・日本大学文理学部教授戸田誠之助）の採択だった。同研究プロジェクトは、様々なコンテンツをデジタルアーカイブ化し、その高度利用の可能性を検討するという、文系・理系の正しく「文理融合」型の学際的共同研究プロジェクトだった。



同研究プロジェクト内には、アジア史関係記録を研究対象とする研究グループが組織され、筆者はそこに参加し、デジタルアーカイブ化の対象として戦前・戦中期「満蒙」関係記録の収集に着手することとなった。これは、筆者の研究領域が近現代東北アジア地域史や近代日中関係史だったことを直接的な契機としているが、後述する黒崎祐康氏（1934～）のご厚情による多量な「ハルビン絵葉書」の画像提供により、デジタルアーカイブ化の対象記録の中核が形成されたところによるところが大であった。いずれにしても、同研究プロジェクトを嚆矢として、日本大学文理学部における本格的な戦前・戦中期「満蒙」関係記録の収集が始まることとなった。

戦前・戦中期「満蒙」関係記録の収集

は、前述プロジェクトが終了した後も、「平成22～24年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業・東アジアにおける都市形成プロセスの統合的把握とそのデジタル化をめぐる研究」（研究代表・日本大学文理学部教授・加藤直人）、「平成28～29年度日本大学研究助成金〔芸術総合研究〕・東アジアにおける都市形成プロセスの実態解明とそのデジタル化をめぐる研究」（研究代表・加藤直人）などの、「東アジア」を正面に据えた学

際的（史学、言語学、文学、地理学、心理学、社会学、情報学）大型研究プロジェクトの中で継続され「なお、これらの研究プロジェクトにおける直接的な研究テーマは、①各種デジタルアーカイブの構築とその登録システムおよび横断的検索システムの構築、②地理情報システム（WebGIS）と各種文字・図像資料・顔情報などの各種データを連関させた新たな資料空間の構築に関する研究などの、デジタルアーカイブの高度利用に関する研究におかれている。その具体的な成果の一端は、2006年以降の『日本大学文理学部情報科学研究所 年次研究報告書』（日本大学文理学部情報科学研究所刊、年刊）や、日本大学文理学部資料館「デジタルミュージアム」(<https://ahj.chs.nihon-u.ac.jp/dm/>)、「ハルビン絵葉書」(<http://ahj.chs.nihon-u.ac.jp/harbin/>)、「江戸・東京 WebGIS」(https://dep.chs.nihon-u.ac.jp/japanese_lang/nichigo-nic hibun/web-edo-tokyo/) などの各サイトを

参照されたい」、絵葉書、地図、ポスター、チラシ、グラフ、写真、文書、日記、定期刊行物などの様々な記録が収集された。その過程で、忘れてならないのは、学外から多数の「満蒙」関係記録の寄贈をいただき、それが日本大学文理学部所蔵「満蒙」関係記録の中核を構成するに至っている点である。

上述した研究プロジェクトを実施する過程で、筆者をはじめとした研究メンバーは、保存・修復作業が終了した収集記録を中心に日本大学文理学部資料館にて展示会を開催し、前述研究プロジェクトの研究成果を広く公開してきていた。具体的には、2009年の「写された〈満洲〉—デジタルアーカイブから甦る哈爾濱都市空間」、2012年の「描かれた〈満・蒙〉—「帝国」創造の軌跡—」、2015年の「現された『満洲国』—〈満・蒙〉影写の多様性と受容—」、2017年の『満蒙』関係寄贈資料展—記録化された在「満洲」日本人の日常と記憶—」、2018年の「形象化された〈満・蒙〉—日本大学文理学部所蔵ビジュアル・メディアを中心として—」の5度にわたる本学資料館展示会がそれにあたる。これらの展示会は、国際善隣協会関係者のご尽力もあり、多くの方に参観いただけたこと

となったが、その際に「日本大学文理学部では『満蒙』関係記録を収集・保存してくれるらしい」ということが「口コミ」で広がることとなり、多くの方から「満蒙」関係記録の寄贈をいただけることとなった。主な寄贈記録の概要は後述するが、このことは、多くの戦前・戦中期「満蒙」関係記録が「行き場に迷っている」状態にあること、別言すれば、放っておくと記録が散逸する危険にさらされている現状を示すものでもあった。冒頭で述べた「喫緊」の所以でもある。

では、どのような戦前・戦中期「満蒙」関係記録が、日本大学文理学部に所蔵されることとなっているのであろうか。次節では、日本大学文理学部が所蔵する「満蒙」関係記録の概要を紹介することとしたい。

2. 日本大学文理学部所蔵「満蒙」関係記録の概要

日本大学文理学部が所蔵する「満蒙」関係記録は、その形態からすると、地図、ポスター、チラシ、写真、絵葉書などの図像を中核情報とする記録（以下、ビジュアル・メディアと総称）や、文書、日記、定期刊行物などの文字を中核情報とする

記録（以下、文字史料と総称）に大別できる。以下、それぞれが内包する歴史的意義の特徴を紹介していくこととしたい。

（1）ビジュアル・メディア

まず、ビジュアル・メディアの特徴を確認しておきたい。

ビジュアル・メディアの特徴の一つに、それが従来の文字のみに頼ったメディア以上に、直接的かつ感覚的なイメージを安易に伝える力を持ち、大量印刷・大量消費が可能なメディアとして、正しく「国民的規模」での発信力を強く持ち得るものだったことをあげることができよう。それは同時に、ビジュアル・メディアが、当該期の対象認識のありようを示すだけではなく、人々をある方向に駆り立て、組織していく可能性を持ったものだったことを意味するものでもあった。この点を「満蒙」関係のビジュアル・メディアに即して別言すれば、当該期の「満洲」やモンゴルに関する作成者たちの認識のありようと共に、当該地域に如何に関わり、如何に活動していこうとするのかという作成者たちの「意志」をも記録されていることを意味するものでもあった。

また、ビジュアル・メディアは、作成者の「意志」に則して全体像からある一部を切り取り「形象」したものであり、

多様な諸主体の織りなす関係の全体性をそのまま客観的に現したのではない点も十分留意しておく必要がある。このことは、ビジュアル・メディアを利用して現地の歴史の実態を再構成する上での注意点を示すものとなっている。しかし同時に留意すべきは、ビジュアル・メディアには作成者の「意志」に関わりなく記録された現地の実態が記録されている可能性もあるという点である。このことは、その断片を丁寧に取り集め、相互に比較・連関させていく作業を通じて、ビジュアル・メディアの作成者が不可避免的に持つ恣意性や固有性を相対化させ、様々な民族、国家、文化の激しい切り結びの中で展開した「満洲」やモンゴルの実態に接近していく道を拓くものでもあることを示している。

日本大学文理学部所蔵のビジュアル・メディアも、以上の特徴を包含するものとなっているが、その具体的な形態別の概要は、以下の通りである。

①地図（約50点）

地図は、自然地理的情報を図像化したものであり、その意味では前近代から存在するメディアである。しかし、日本大学文理学部が所蔵する戦前・戦中期「満蒙」関係の地図の多くは、様々な客観的

指標（縮尺や緯度経度など）を利用しつつ、国境という国家を前提とした自国と外国の区分する境界が書き込まれ、あるいは国内の様々な行政的な区分が視覚的に明示されるという、まさに「科学的合理性」と「国民国家」という「近代」世界を象徴する内容を併せ持つものとなっている。それは、国家をまたがる広域地図から、鉄道や交通路あるいは商店名などの様々な都市インフラストラクチャー情報を記載した「市街図」まで共通する特徴と言えよう。

このような「近代」的指標を内包した地図は、その客観性から掲載された情報に対する強い説得力や正当性を読み手に与えることとなっており、そのことが、やがて地図という形態

それ自体に、

その掲載情報に関わらず、信用を付与すること

となっていく。この特徴を活かしたのが、自然地理的



図1 物産図

情報の正確さを離れて、主観的に選択された情報を掲載した「物産図」などの一定の主張を際立たせる地図だった(図1)。

他方、地図が外国と自国との関係を理解する手段の一つであった点を、より強調する形で作成されたのが、江戸時代前から存在した技法を利用した「鳥瞰図」だった。日本大学文理学部所蔵の「鳥瞰図」は日本人により作成されたものであり、その利用者も大半が日本人だったと考えられるが、そこでは、客観的な自然地理的情報から離れて、当該期の日本人の世界認識の広がりを一望する中で、対象地域が描かれることとなっていた。

②ポスター・チラシ(約30点)

前述した通り、ビジュアル・メディアの特徴の一つは、作成者の意志を強く反映し得ることにあった。その特徴を色濃く反映したものが、ポスターやチラシだった。とりわけ、「満洲国」(1932〜45)において作成された様々なポスターやチラシからは、時々の「満洲国」や日本政府が求めた政策課題の遂行にむけて、現地の人々を動員していこうとする強い意志を見て取ることができる。

もちろん、これらのポスターやチラシにおいて強く主張されている内容が、現

地社会の実態をそのまま描き出しているとは限らなかった。確かに、

自らの意志を實現しようとするれば現地の実態を反映した表現をとらねばならず、所謂「合璧」

形式をとった布告ポスターなどは(図2)、現地における多民族社会の実態を反映したものだったと言えるよう。しかし、現地実態形成に不可欠となる現地で多数を占める非日本人が、日本側や「満洲国」の意志を如何に受け止め如何に対応したのかを記録するポスターやチラシは極めて稀であり、ポスターやチラシが示す内容と現地社会の実態についての関係解明には、別途、他のメディアによる検討が必要と考えられる。

③アルバム、絵葉書、グラフ(約400点)

本記録群は、日本大学文理学部所蔵の戦前・戦中期「満蒙」関係記録において最多数を占めるものとなっている。



図2 漢蒙合璧

地図のところでも述べた通り、メディアの持つ説得力や正当性は、その記録内容の正確さの延長に担保される一面があった。このことは、もし眼前の現実をありのままに記録することを可能とするメディアがあれば、それは極めて有力なメディアとなることを意味するものでもあった。この役割を他のメディア以上に強く担ったのが写真だった。とりわけ、1910年代以降における写真印刷技術とマスメディアの発達および、1920年代以降カメラが、個々の家庭への普及までには至らなくとも、徐々に一般社会へ普及し始めたことは、多くの人々が写真を有力メディアと捉えていく契機となっていた。ここに、絵葉書や様々なグラフ雑誌に当該期の社会や個人を写し撮った写真が使用され、さらには個人レベルでもアルバムなどに、多数の写真記録が残されることとなる。

これらの写真には、表層的には言わば「見たまま」の記録が残されることとなり、現在は失われている景観の復元はもちろんのこと、それらを時系列的に比較検討することで現地社会の景観変化などの把握が可能となるなど、現地社会を歴史的に理解していく上で重要な手がかりを提供してくれるものとなっていた。と

りわけ、前述した黒崎氏寄贈を中心とする「ハルビン絵葉書」(約2500点)を中心とする絵葉書は、日本大学文理学部所蔵戦前・戦中期「満蒙」関係記録の中核をなすもので、「市街図」と合わせ利用することで、戦前・戦中期のハルビンの景観復元や景観変化の様相を検討する上での貴重な記録群となっている。

また、写真を利用したビジュアル・メディアの特徴の一つに、大量生産・大量消費が可能という側面もあった。絵葉書やリーフレットなどは、その典型的な事例であり、人々は安価で大量生産されたこれらのメディアを入手・消費することで、そこに印刷された対象に関する特定のイメージを共有することとなり、対象のステレオタイプの認識が広範に生み出されることとなっていた。それは同時に、これらのビジュアル・メディアが、言わば「時代の空気」を映し出す〈鏡〉ともなっていることを示すものだったと言えるよう。日本大学文理学部には、上述した「ハルビン絵葉書」の他にも、大連、奉天、吉林、チチハル、長春(新京)、安東、牡丹江、延吉などの都市景観の絵葉書に加えて、大石橋の「娘々廟祭」などの現地民俗を記録した絵葉書、大豆・高粱という現地特産品に関わる風景を記録

した絵葉書など、現在まで続くステレオタイプのな「満蒙」イメージを象徴する絵葉書が多数所蔵されている。

もちろん、写真もまた、ポスター・チラシと同様に、現地実態の総体をそのまま現しているものではなかった。写真には、撮影者の意図に添って「撮りたいものだけが撮られている」という側面があったからである。それは、撮影対象が、それを存立させている現地の諸関係から切り離され、撮影者の意図に合致した別の意味を付与されてしまう危険性を孕むことを意味するものだった。しかし同時に留意しておくべきことは、写真には撮影者の意図から離れた対象をも記録する一面を持っていた点である。そこには、撮影者により部分的に切り取られ再構成されてしまった現実の全体性を取り戻す契機が図らずも残されていくことともなっていたのである。

④「亜東印画輯」(761点)

「亜東印画輯」は、大連に拠点を置いた亜東印画協会が1924年から1944年頃まで発行していた、生写真を貼り付けた写真帖で、写真に対し短い解説文がつけられ、10枚を1セットとして、1か月に1回、会員向けに配布されたとされるものである。写真は中国、朝鮮半島、

モンゴル地域などにおいて日本人撮影者が当地の風俗や民情、自然風景、歴史的建造物などを撮影したもので、当時の様子を伝える貴重な記録となっている。同記録は、日本大学文理学部資料館「デジタルミュージアム」にて公開中である。

⑤映画『蒙古横断』

『蒙古横断』は、1925年、バーリン(巴林)右翼旗親王ジャガルが北京から内モンゴルのバーリンに帰郷する過程の様子を中心に、当時のチベット仏教祭典やバーリン右翼旗周辺での巻狩りの様子など、現在では確認することが困難となった景観、事物、活動などの極めて貴重な映像が数多く記録された映画で、当該期の内モンゴル社会を知る上で第一級の稀観資料となっている。

この記録映画を作製したのが、当時ジャガルとの親交があり、その帰郷に同行した、薄守次(1889-1969)だった。薄守次は、当時の世上で「馬賊・天鬼將軍」とも呼ばれた薄益三(1879-1940)の甥で、益三の片腕として「馬賊・白龍」との別名を持ち、1916年のバボージャブらによる東部内モンゴルでの武装蜂起に参加した経歴や、東部内モンゴル地域での各種事業を展開する実業家として、「満洲」日本人社会で

は広く知られた人物だったが、日本人に内モンゴルへの進出の必要性を宣伝する目的で、南満洲鉄道株式会社（満鉄）から撮影機材などの支援を受けて、この『蒙古横断』の作製に着手したと言われている。撮影終了後、理由は不明ながら満鉄が同映画に興味を示さなかったことから、結果として、薄守次自身がフィルム編集から上映企画までを行うこととなる。上映された『蒙古横断』は、日本内地を含む各地で好評を得て、摂政宮（後の昭和天皇）への上覧にも供せられている。同映画は、戦後、所在が不明となり、長らく「幻の記録映画」となっていたが、広川佐保氏（現新潟大学准教授）の調査により薄守次のご息女である薄悦子氏がフィルムを保管されていることが判明し、その後、薄悦子氏のご厚意により、2006年日本大学文理学部図書館へ同フィルムが寄贈された。日本大学文理学部では寄贈されたフィルムをクリーニングした上で、16mmフィルムでの複製を作製し（オリジナルフィルムは35mm）、そのビデオテープ化とデジタル化を行い、『薄悦子氏寄贈・薄守次作製『蒙古横断』』として保存している。

（2）文字史料（約70点）

日本大学文理学部所蔵の「満蒙」関係

記録の大半は、上述した収集の背景となっている研究テーマとの関連から主にビジュアル・メディアで占められているが、現地の政治的展開過程を記録する公文書、旅行記や調査報告書などの手稿本を含む図書、自らの認識を記録した日記やメモおよび書簡など、文字を主体とするメディアも存在している。

図書は、挿絵や写真を加えることで、ビジュアル・メディア普及以降の状況に対応しつつ、その影響力の確保と強化が図られていた。また、主導的な社会規律や政治的指導性と目されているもののへの違和感が記録されることもある日記などの個人的な手稿記録は、1930年代後半以降、強い政治的統制下に晒されていくこととなる多くのビジュアル・メディアが黙して語ることがない対象の存在を浮かび上がらせる可能性を持つものとなっている。その意味で、文字を中心とするメディアとビジュアル・メディアは、歴史の実態の再構成において相互補完的な関係にあると言える。

（3）寄贈記録

前述した通り、日本大学文理学部では、多くの方から様々な記録の寄贈をいただいている。寄贈を受けるにあたって日本大学文理学部では、永久保存と学術研究

および公開を前提（ただし、個人情報に関しては例外も設ける）とした上で、次の3点に留意している。

1点目は、当該記録を保存した本人および親族のファミリーヒストリーの聞き取り調査を可能な限り行うということである。これは、寄贈記録の保存の意味を、研究者の単なる研究素材として当該記録が直接的に記録した内容のみを言わば「摘み食い」的に「消費」するというところだけに置かないという姿勢に由来するものである。これは、当該記録が包含する「この記録がここに残された意味」も記録する、別言すれば、当該記録を保存者の個人あるいはファミリーヒストリーの中でも位置づけることで、当該記録が「残された」ことで新たに内包することとなった歴史的意義を言わば「発掘」するための環境を整備するということを意味するものである。当該記録に新たな歴史的価値を付与する作業と言ってもよろう。日本大学文理学部は、受け入れ作業期間が長引くことも厭わず、この作業を行っている。

2点目は、寄贈希望者に対して、学術的資料価値と修復・保存・公開方針のみならず、当該記録が持つ古書・骨董市場での価値も説明するということである。

後者の説明は、長きにわたり当該記録を保存してきた本人や親族が負担したコストに配慮したものであり、寄贈者のより納得のいく（後悔が少ない）寄贈を進めることを念頭に置いたものである。

3 点目は、寄贈が確定してから修復・デジタル化が完了した際には、そのデジタルデータを寄贈者に提供する（ただし、利用範囲に関しては事前に申し合わせておく）と共に、当該記録を利用した展示会などのイベント開催にあたっては必ず案内状を送付するということである。これは、寄贈者への感謝を示すと共に、寄贈者あるいはその親族・関係者から類縁情報や新たな記録の提供をいただける可能性をふまえることである。事実、日本大学文理学部への寄贈記録は、この寄贈者が新たな寄贈者を言わば「連れてくる」という形で進むことが多々あった。

さて、以上の経緯を経て、現在整理が終了しているものを紹介すると以下の通りとなる。

①「黒崎コレクション」

「黒崎コレクション」は、少年期をハルビンで過ごされた黒崎祐康氏により収集された、ハルビンをテーマとする、主に絵葉書、図書、パンフレット・リーフレットなどの約4000点の記録からなっ

ている。絵葉書に関しては一部公開をしているが、他の記録は現在も整理を進めており、全体の公開は2020年度を予定している。

その中心となっているのが絵葉書（大半は未使用）で、戦前・戦間期に発行されたハルビンの絵葉書がほぼ網羅されており、その充実ぶりは日本国内では屈指のもので、今後のハルビン研究に大いに貢献し得る貴重な記録となっている。加えて、現代のハルビン写真も多数含まれている。黒崎氏は、日中国交正常化によって日本人がハルビンを再訪できるようになった1980年代以降、繰り返しハルビンを訪れ、絵葉書に記録された建造物の踏査を行うと共に多くの写真を撮影されており、1990年代に入り高層ビルが林立するなど大きな変貌を遂げたハルビンの現状をふまえると、黒崎氏が撮影した1980年代のハルビン都市景観写真も貴重な歴史記録と言えよう。さらに、戦前・戦中期の絵葉書と対比させることで、ハルビンの中華人民共和国成立後の変貌を確認することも可能となっている。

また、ハルビン観光関係記録も多数含まれている。ハルビンへの日本人の進出は、同都市の建設が始まった20世紀初頭から確認できる。しかし、本格化するの

はロシア革命以降の1910年代半ばからであり、大きく飛躍するのは「満洲国」期になってからだ。この「満洲国」期の前半には「満洲」観光ブームと呼ばれるような状況が生まれ、大勢の日本人がハルビンを訪れ、それに伴いハルビン観光に関するパンフレットやリーフレット、地図、冊子などの様々な観光関係印刷物が公刊され、「黒崎コレクション」にはこれらの記録も多数含まれている。

その他、ハルビン関係図書も多数含まれている。黒崎氏には研究者としての顔もあり、ハルビンに関する研究書を複数冊著されている。ハルビン在住経験者の視点からの研究は黒崎氏の世代をもって最後になると考えられ、これらの著作群はハルビン研究史における重要な成果となっている。そして、その過程で黒崎氏が収集した図書が、本コレクションに納められているのである。そこには、稀覯本を含めた数多くのハルビンに関する図書（戦後刊行されたものも含む）が含まれており、戦前・戦中期ハルビンを検討する上での基礎的な図書が揃っているとさえいう。

②「石橋岩之旧蔵資料（穂刈明子氏寄贈）」（約240点）

本資料は、石橋岩之氏（1914～96）

が、1934年から37年にかけて兵役により「満洲国」北部において現地の治安維持と対ソ国境守備についた時期の写真から構成されたものである。兵役時期の写真は、兵役終了時に所属部隊から配布された記念アルバムに貼られているものが中心となっており、当該期のソ連国境の緊張感と兵士の日常の一端が垣間見える貴重な記録となっている。

③「青地清彦旧蔵資料」（山田紗代子氏寄贈）（約290点）

本資料は、地質学者だった青地清彦氏（1919〜45）が、東京帝国大学在籍中に「満洲国」の地質調査に向かう過程で購入した朝鮮と「満洲国」各地の絵葉書を中心に構成されたものである。本資料は、当時の人々にとっての「外地」への公務出張が、観光的側面を併せ持っていたことを示す好個な事例ともなっている。本資料内の絵葉書に関しては、前掲日本大学文理学部資料館「デジタルミュージアム」で公開中である。

④「二神コレクション」

「二神コレクション」は、「満洲国」新京（現長春）で生まれ、生後すぐに牡丹江に移り、同地で終戦を迎えた二神照夫氏（1932〜2016）が収集された牡丹江の絵葉書を中心とした約370点

からなる記録である。その中核となる牡丹江の絵葉書は、現存が確認できる「満洲国」期に発行された同地絵葉書セット20冊中の13冊を網羅しており、当該期同地の景観を知る上で極めて貴重な記録となっている。本資料内の絵葉書に関しては、前掲日本大学文理学部資料館「デジタルミュージアム」で公開中である。

⑤「阪下徳道旧蔵資料」（約1500点）

本資料は、阪下徳道氏（1886〜1967）が「満洲国」の警務官として活動していた時期の記録を中心に構成されている。本資料群の中核となるのが、1909年から44年まで断続的に書き続けられた日記（計33冊）と警務官として職務の中で入手した現地公安関係文書および、当該期の人間関係を照らす板垣征四郎からの書簡などである。これらの記録は、理想をもって渡満した者が直面した日々の暮らしと「満洲国」の現実が記録されており、同国の実態を知る上で極めて貴重なものとなっている。

⑥「松浦薫旧蔵資料」（約2500点）

本資料は、松浦薫氏（1904〜75）が土木請負業社である「満洲松浦組」の支配人として「満洲国」において活動していた時期の記録を中心に構成されている。その中心となるのが、松浦薫氏自ら

が撮影した約1800枚にのぼる写真資料である。これらの写真は、「満洲国」に帯同した妻や現地で生まれた子どもたちの姿を記録することを主眼に撮影されたものであるが、「満洲国」に暮らす日本人の暮らしぶりや街並みはもちろんのこと、現地の中国人たちの暮らしぶりも期せずして記録されており、同資料内にある他の生活関係資料と共に、現地日本人の日常生活を知る上で貴重な記録となっている。

⑦「杉本恒記旧蔵資料」（445点）

本資料は、杉本恒記氏（1897〜1985）が南満洲鉄道株式会社の社員となり、「満洲国」北部水運の要だった松花江における水運事業の中核企業だった満鉄北滿江運局で活躍した時期の記録を中心に構成されている。その中核となるのが、1932〜44年の満鉄北滿江運局勤務時代の写真アルバムであり、松花江水運と水運港の風景および、松花江水運事業において不可欠な船舶ドックに関する写真が多数含まれている。当該写真記録がほとんど残存していない現状をふまえると、従来の実証的空白を埋め得る極めて貴重な記録と言える。

⑧「赤木英道旧蔵資料」（398点）

本資料は、赤木英道氏（1892〜1

943)が南満洲鉄道株式会社(以下、満鉄)の総裁室嘱託として大連で、そして満鉄ニューヨーク事務所長として米国で活動していた時期の記録やラジオ放送の下書き原稿を含む手書きやタイプされた原稿、満鉄の内部資料、さらに切手収集家として収集した国内外の切手情報誌や自身の著作などから構成されている。とりわけ、1939年8月、満鉄ニューヨーク事務所長に就任した後、日中戦争により悪化した米国の対日世論の緩和を目指して米国のラジオ放送に出演した際の放送原稿は、当該期の対米プロパガンダの一端を知る上で極めて貴重なものとなっている。さらに、切手収集家として知られている赤木氏が、切手関係資料、特に日米両国の切手収集家向け情報誌に執筆した記事や原稿は、切手もまた「満洲国」の既成事実化を図るプロパガンダ・メディアであったことを示す好個な事例を示す記録となっている。

おわりに：保存と公開における課題

以上、日本大学文理学部における戦前・戦中期「満蒙」関係記録収集の経緯と、収集資料内容の概要について述べてきた。最後に、その過程の中で明らかとなった

いくつかの課題を確認しておきたい。

まず直面した、大きな課題は、収集記録の修復・保存に必要な資金の確保である。収集資料の多くは、汚れはもちろんのこと破れなどの破損や皺・折れがあることが普通であり、長期保存を前提とすれば、それらの補修作業が不可欠となる。それらの作業には、専門的な知識と技術および工房が必要となるが、日本大学文理学部内にはそれに対応できる部署も人材もないのが現状である。このため、これらの一連の作業は、紙媒体記録に関しては堀内カラー(<https://www.horichi-color.co.jp/service/print/index.html>)に、写真資料に関しては株式会社カロワークス(<http://www.cdo-works.co.jp/>)に、それぞれ外部委託して対応してきているが、その経費は大きな負担となっている。とりわけ、前述した大型研究プロジェクトの研究期間外においては、その実施が極めて困難であり、せっかく寄贈いただいた記録の公開に、数年もかかるという事態となっている。

次に大きな課題となったのが、公開・利用の手続きと技術担当者の人材確保だった。具体的には、公開予定記録の著作権や個人情報処理と、デジタル公開における各種システム構築担当者の継続的確

保に関してである。前者に関しては、単純にパブリックドメインとして処理できない記録が多く、作成者が明確な写真や著作などの作品の著作権者の有無の確認や、個人情報部分を言わば「黒塗り」にしていく作業の繁雑さは、後述する人材育成・確保の恒常的な厳しさの中にある日本大学文理学部にあつては、大きな負担となっている。もちろん、これらの作業を外部委託することも考えられるが、前述した資金確保の厳しい現状では実現は難しい。また、後者に関しては、幸いにも日本大学文理学部には情報科学科があり、同学科の研究者が前述した研究プロジェクトに共同研究者として参加いただけていることもあり、同学科の学生・院生たちが自らの研究の一環としてシステムの構築と継承に取り組んでくれている経緯がある。このため、現状では、大きな資金的負担を回避しつつ作業を進めていくことができているが、これとて、学生・院生の問題関心が他のテーマに移れば持続ができなくなり、極めて不安定な状況に置かれていると言えよう。

三番目は、本事業を進めていく上での現場で統轄していくことが可能な学芸員人材の育成・確保環境の厳しさである。戦前・戦中期「満蒙」関係記録の保存・

公開の実質的作業は、上述した研究プロジェクトのメンバーというより、日本大学文理学部資料館の学芸員により担われている部分が大きいのが現実である。しかし、日本大学文理学部資料館の学芸員は2名しかおらず、実質的な延長のない任期制職員のため極めて不安定な待遇となっている。加えて、本務でもある学生の学芸員資格取得課程の校務も山積しており、通常勤務時間内だけでは上述した記録の保存・公開に関する諸作業に手が回らないというのが実情となっている。

以上のことは、日本大学文理学部に固有の問題という側面もあるが、おそらくは記録の保存と公開に正面から取り組もうとする多くの公共研究・教育機関で共通の課題であるとの印象を筆者は持っている。

では、どのような対処方法が考えられるのであろうか。もちろん、抜本的には、歴史的資料の収集・整理・保存に関して、現実的には「不休」であることが求められているにもかかわらず、直接的な費用対効果の観点から「不急」と見なされ、十分な予算処置もとられないまま、極めて厳しい研究費環境にさらされていることを致し方ないとする、社会大方の認識を変えていくことにあることは間違いあ

るまい。しかし、その対応には長期的な社会への働きかけが不可欠であり、「不休」であることからくる当面の対処の必要に応えられないことも事実であろう。この点をふまえると、実は筆者にも妙案はないのであるが、以下では、当面の弥縫策として検討してもよいと思えることを述べて、本稿を終えることとしたい。

それは、記録を収集・保存・公開していく開かれたプラットフォームの開設である。限られた資金とマンパワーを少しでも有効に使うためには、各保存・公開機関において重複する作業をなるべく一本に絞ることが必要と考えられる。例えば、複数の機関が同一の記録を持ち、そのいずれもが補修を必要とする場合は、実際に補修する資料を一つにしぼり、その補修費を複数の機関が均等に供出し、補修終了後は、そのプラットフォームが当該記録を保存し公開し、記録が重複した各機関はデジタルデータを共有すると共に、必要に応じて修復済み記録の原本を適宜借り出して公開などに利用することも認めるというようなことである（補修済み記録の利用時期が重複した場合の対処のために、事前に調整方法は決めておく）。もし、当該記録が寄贈されたものならば、寄贈に際して収集した諸情報

も共有しておくことも大切である。

このプラットフォーム開設の持つもう一つの利点と思われることは、多くの記録が集まってくるという意味で、歴史研究における記録利用の利便性が大きくアップする点である。それは、共通の記録的基盤という、研究水準を高めていく上で極めて重要な対等な議論を行うための土台作りがなされることを意味するものでもある。

もちろん、以上の案は、そもそも全く同じ記録などなく（たとえ大量印刷物であっても経年変化による差異が生じる）、重複記録という考え方自体が間違っているとか、前提となっているプラットフォームを運営していく資金はどうするのかといった疑問がたちまち噴出してしまい、思いつきの域を出るものではない。

ただ、上述した通り、戦前・戦中期「満蒙」記録に関しては、その保存・継承の大きな瀬戸際にきていることも確かであろう。個々の機関が抱え込んでしまっている閉塞感を乗り越えていく上での、無謀かもしれないが一つの話題提供になれば幸甚である。